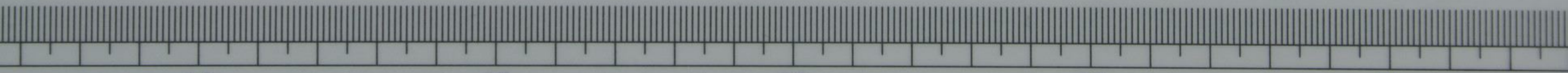




季寄
 註解
 改正月令博物考
 三月部
 三

三
 改
 5-29
 3



10

15

20

25

30

二五
529

三月部目録

△印あつハ俳偈
の季と持物人

○養生の法。雨風の考。米乃豊
呼。妙茶その外人家重宝のこ
慮々小概多ありゆへ
月脈ふくれとあるます

三月

陰陽生 異名並註 調子

清明節

七十二候 二丁 △此化の期と知 三丁

穀雨

キニ候 三丁 花盛の期 四丁

八十八夜

三丁 土用 日天氣 四丁

日令

此部ハ三月日の定とする
事支の定りたるハあるす

来子

五丁 △松尾明神御出 五丁

天手経供養

三丁 △御燈北早奉 五丁

鶏闘

三丁 △上巳節 五丁

重三

△曲水餽 三丁 △流觴會 五丁

執蘭節

△桃花節 五丁

草餅

△蓬餅 △菱餅 六丁

日朔

60 65 70 75 80 85 90 95

三月一日 御

△己日 杖 七丁 △次 御杖 七丁

△曲水宴 三丁 △巡水宴會 七丁
△巴の字の水 八丁

△雛遊 △ひな祭 △たてひな 八丁
△ひなあそび

△汐干 三丁 三日祝儀文 九丁

△石山祭 三丁 △粟津祭 三丁

△土佐海碩會 三丁 △一乘寺祭 三丁
△修學寺祭 三丁

△巖峨大念佛 三丁 △水尾祭 三丁
△高尾法花會 三丁

△稻荷明神御出 三丁 金毘羅會式 三丁
△安樂花 三丁

△吉野會式 三丁 △善導忌 三丁

△山天台礼拝講 三丁 △鎮花祭 三丁
△善導御忌 三丁

△千本大念佛 三丁 △生寺大念佛 三丁
△梅若祭 三丁

△勸學會 三丁

△江州比良祭 三丁 無縁經修行 三丁

△ひんぎの神事 三丁 △人丸祭 三丁

△高尾女詣 三丁 △御影供 三丁
△爐閉 三丁

△月令 此部 八日のことごとく
三月一ヶ月のしごとくありす

△順峯入 三丁 △花の縁 三丁

△小弓引 三丁 男女衣服式 三丁

△時衣 △ミミ衣 △ミヤ重 △山吹衣 三丁
△ミヤ重 △ミヤ重 △ミヤ重 △ミヤ重

△寒食 三丁

△時令 此部 三月の時候 小丁

△暮春 三丁 △春限 三丁
△春の邊 三丁

△三月尺 三丁 △春霜 三丁
△春の尺 三丁

△草木 此部 三月一ヶ月 三丁

△花 △櫻 △連歌 △能登 三丁
△能登 △能登 △能登 △能登

△花見 △榎 △榎 △榎 △榎 三丁
△榎 △榎 △榎 △榎

△庭 △榎 △榎 △榎 △榎 三丁
△榎 △榎 △榎 △榎

△榎 △榎 △榎 △榎 三丁
△榎 △榎 △榎 △榎

△榎 △榎 △榎 △榎 三丁
△榎 △榎 △榎 △榎

△榎 △榎 △榎 △榎 三丁
△榎 △榎 △榎 △榎

三月菜	若菰
菊	胡蔥
櫻のり	茶摘
かき茶	

月生類

此部より二月より三月の生りもの

呼子鳥	麥鶉
残る鶴	雲入鳥
鷓鴣	蛤
櫻鯛	櫻鯛
若鮎	上り梁
青饅	

三必用

此部より風雨の口の破取の
向方の日取の吉凶の他行の心
得の作事の上の由の料理献立の法食
物の好悪等其外品々あつむ九日の定まる
事ハロの日令の部より三月の定まる
事ハ三月下月の要用のこと候あつむ

三月目録

三月之部

△卯ハ季と持
物不用のりの人



今月百花咲やこ
ろの遊賞するふ
及く人間的
の故障ある
ハ風雨明日の
事より
ひまわりの山
野よりあそびて
情をのびて

五陽ハ三月の異名ハ沢天共ハ五陽
長ク陰消する意共ハ去るの義

異名

季春 中姑 春晚 稷月
蠶月 暮春 殿春 五陽

鶯時 竹秋 春末 春杪 残春 春
婦姑 洗生 花見月 櫻月

春惜 三月 さくら月
花津月 夢見月 志めり月

異名註

○季春ハ名の名のなる
ありの中姑ハあひこ

もろく。稷月ハ上巳のころとい
する月されはかくいハ蠶月

かゞ依る月といふ事あり。暮春へたるの心。殿春いへるれはんがりと云意。五陽ハ註あり。鶯時ハうをいとのなく時。竹秋たうかの時をいへく。春末ハんのことあり。春柳ハさう乃むら。残春ハのころ多ひとつといふあり。春婦ハさうか。屋う。姑洗ハ姑ハ古あり洗をぬく之万物皆やれと去りてあつてくをいへ義あり。弥生ハ春の陽氣よりて萌へ出る草もこの月いふく生ひさうん多れはひやあひ月といふく。畧してやよひといふなり。

蔵王 蔵王 蔵王

おひへるもささはく海あり

花津月

花津月

いさくこれハ社われぬへ

蔵王 ささく月

かべて今さかりとて梅月

うすくありあるは方のふね

夢見月

さうらうさう勢のふ乃夏見月

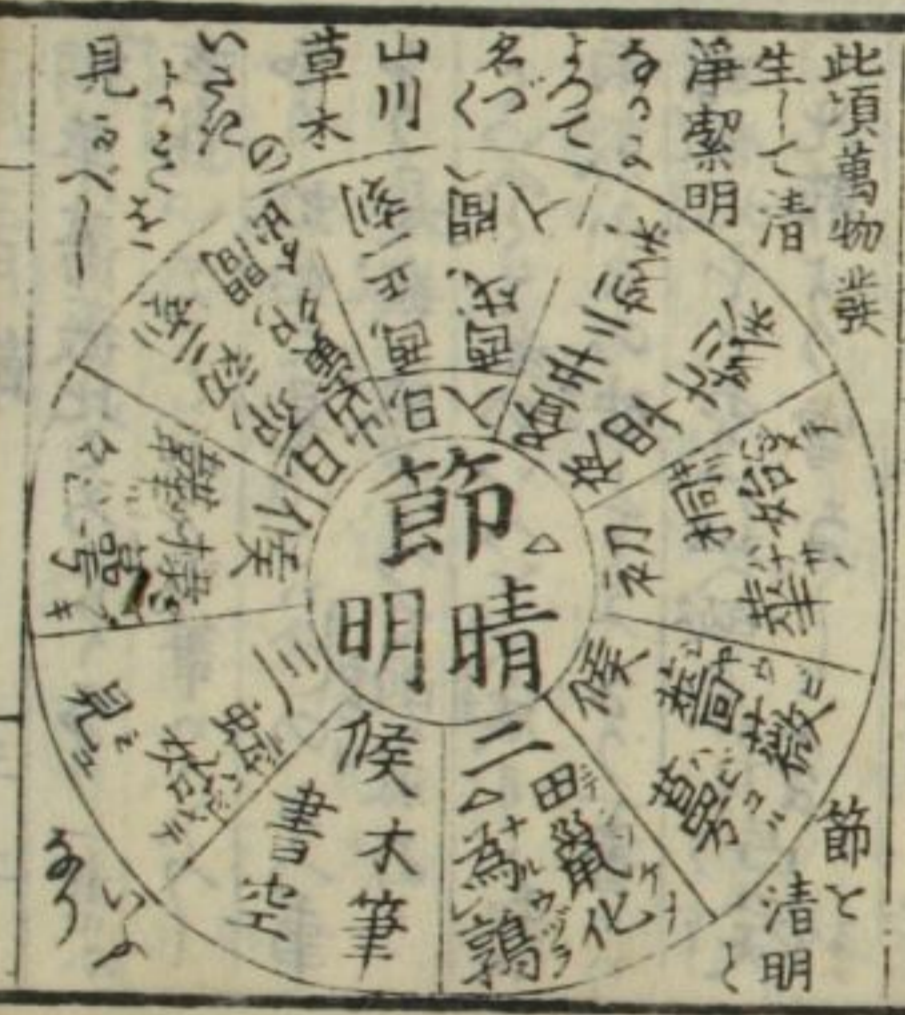
嵐のさかけ雲のさうをせ

花見月

うとくありをむひらのむ見月

あてあうもわくさあめん

節。立春。七十二候。草木七十二候。昼夜長短。日出入等左記を



桐華薔薇此ごろくろくろく一書ふ
玄鳥いづろくろく木筆いこくろく
かゝり虹始て見ゆらんかゝり
あり是寒氣ふよつて雨氣あり
とつへくと虹のいろと不成りく虹
雨氣小日の映じとろくろく一書ふ
鴻雁北とくあり北へ節占候
○此節より雪あり

雨降りておろよりまへ晴るまへ
早登収る昼より後暗るまへ
晩蚕収る○風東北より吹バ月
未至まで米の價貴く東南
より吹ハ中旬ふ米價貴くと
ども月未に至て賤く西南
吹バ月末まで米價貴く西北
あけハ中旬まで米價貴く

節花期知 年の寒暖ふつと
いふも此頃桃の盛
あり伏見桃山揚津 稲田其外
凡此前後小く櫻も一重なる皆

今日辰
の時
雲の
ゆ
方
角
を
以て
年中
の
こと



詩 清明日偶題 王世貞

穠李夭桃名
開ケリ傷心
人墓所ノ掃
無常ヲ感シ
生憎介子成
日春 風光ヲ
推テアハレム

今日
ハ
庶
今
日
ハ
庶
今
日
ハ
庶

唐ノ忠臣ナリ

妙術 去樹虫法 今夜子の刻樹木の上をくわいて

牌諸虫法 今日戌の方け上土

をとりて荷の毛を煎じて泥土とくみ屋内門戸の孔穴を塗る事六候其外一切の虫家の内ふん事か一月令廣義ふ出さう

中 七十二候。草木七十二候。日ノ出入。昼夜長短。左ふあるす



此頃の雨百穀を生ず
薄始て生八頃日池の中陽氣ヲ蒸きて草生と一書小葭とも芦

ともあり揚萍成鳩鳴羽拂も春の陽候あり一書小第二候

牡丹華さくとあり裁勝とい百舌あり桑小下ねる绣球櫻桃あり

妙術 治熱病法 今日茶を炒て蔵り置き此

茶と煎り吞めば痰嗽百病一切の熱病を治さうなり

花盛期 吉野山でも山上お遅く山下早いと

へん中より七八日前と盛る京智恩院根津鷲尾山をへて八重

九重の名木此頃より御室鞍馬八幡等今五七日も遅し

八十八夜 立春の節より八十八日め瓜いふあり

俗説か名残の霜といふ凡春の氣終り夏は火氣に变化するの節さるが霜も此頃より

あつさるといふさるへ此と

霜降を草木のころを
損をひて其ふせをよへ
○綿をまく此前後より八十八
夜の四月五日までまくる

土用 一年四季小土用を合て
一季七十二日として三百

六十日あり土用の中央まで信守り
四季春木夏火秋金冬水の間に
配して十八日三分なり十九日の
事あるも刻数にてはやより十

八日三分あり三月節ふ入てより
十三日め土用の入り夏秋冬同是
土用天氣 土用の内西北より

然るも北風吹出せば晴る南
風はよて雨ふる○雨ふるづく
と死も北風ふき出せば雨暗ると
又とも三四日の中又雨よりよ

不も東風こそよく時々晴
はづく土用の常の天氣と異く

日令 三月日の定まり事
支の定まりたる依記す

午ノ**来子** 桑蠶の蠶今日蚕を
初て来小付るを利

上ノ**京** 松尾明神御出七日の間
御旅ふて法楽の能あり

朔不成 **天氣** 暗天の五穀ふ
とろりかた

あつひい人病事多し○大風吹
ハ病多く草木虫多し○北風
吹て朝より暮の時ふく
まで止まれば米價貴し

江戸 紅毛人四脚丹筆二 **天氣**
若外療登城日

今日雨ふれハ **大坂** 天王寺經堂
早いたるの經供養の

刻ふ **養生** 今日夫婦の **占**
あがり

侯 今日風ふれハ梨樹小虫は守
る雨ふれハ葉の葉あし

みはより夜ふ入り多 **御燈**と

北斗に奉る ひうし北山の高き峯に火を燃

て北辰を供せりさけるとも今

御殿の北向に御座をいきて

御拜あり **闘雞** 禁裏にて

とてなり 朱雀院の

朝十番の闘雞ありしより今

も是を行らざる事なり

非炭の煮えたぬ種ひくか晋

分らして扱ててむまりて **幽調**

狂雞も相撲ふ似たりわみ坂の

閑のからこ入あたる勢は **法路寺宗増**

上巳節 上の初儀なり初の

己の日と以上巳の節

以後後世三日不定 奥の己

の日れ後乃所又記と **三重三**

日にも三まれ **曲水節** **流觴會**

執蘭 蘭と水上いりて不浄と

後除する事詩経の **鄭風**に見たり

桃花節 唐の世に三日と令節と云づけり

桃花生玉澗 **柳葉暗金溝**

右の詩事文類聚上巳の処に出たり

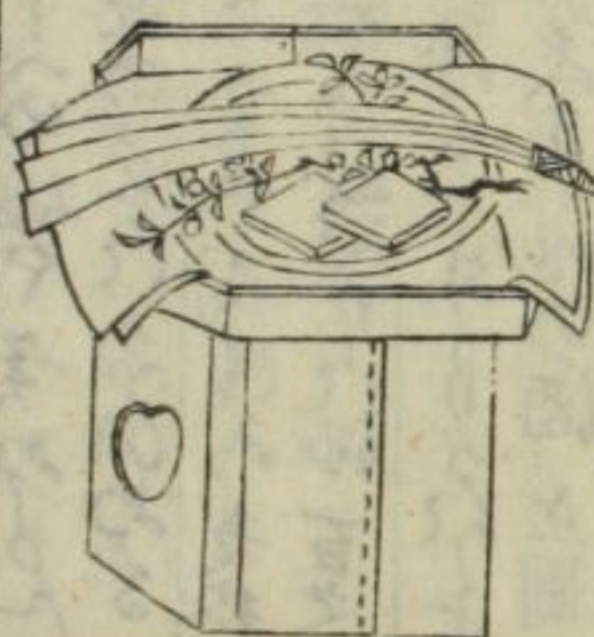
生花式正

桃。柳。やま。が。さ。これ等をいひべし

三月三日

三方

諸禮家 本式



夫木

為家

我をりあくまを花ふ碎ふたり

新撰六帖 光俊

桃のよみあやみ生の三日は系

非桃の目やゆめを病うと和玉川

膳やよみ桃花の結けし其角

柳づら

今日柳と 桃花酒 今日

酒和して呑と月令廣義よあま

とと其能よく瀉下す殊更千葉

花を服をれを血出てやまんと

本草ふあれが香べうばたてし

かそへてかざらん事をと風流は

公朝

夫木

天の川にべの極や笑わらん

をさへ花のさのさひわる

排 盆ふ池のやや奇はあ 麦林

入平たひ致をい我より此酒 百之

狂 疾人のさるうく斗りるれを

こくをれら入り 池の酒立圃

草餅

蓬餅 菱の餅 母子餅

と名づく 今日食とる事唐ふも

あり本朝ふも文徳実録ふもこ

草の餅を用る事あれが古へい

足を用ひしなり 艾も能くれ

物きれの中せうり用るともさる

能 常の末てそめづん坪の候 嵐雪

狂 かく足もあふささつとを継ぎぬの

麦のりらぬの杯ちここの好

白くも巻も巻も入して 杯とより

はくもらんごひいれち行風

己日拔 水辺のて抜して疾

病を除くこととる

是 周の世かろしを魏の時

より三日と用る事いさうしう

己の日と用る事い当月辰の月

かとの己を除日とさふ之本朝ふ

も古代の己の日と用ひくま雄略

帝元年上己日清苑は御幸あ

る事日本紀ふ出さう

能 打ふへ花で己の日たうへ宗因

おまもむあうこの

日たうへ嵐方 須磨御

技 光源氏須磨の浦小左近の時

陰陽師は仰せて御技なま

了丹小人かごとほろ 曲水

の事多く出されば唐かも久し 盃を流しをる 曲水の

して流水小杯を浮べ其杯の我 杯とて香する事本朝み

が前と過る先詩と作りて後 顯宗帝の御宇より始まれり

草庵 頃阿

るる花の香もそと 夫木 後京極撰政

ちる花をくへの園居れそと 同 定家

流るふたふた乃さつと

かろ人のあはれつてあつと

浪よあつとあつと

詞もあつとあつと

狂花を下ゆくあつと

うらみあつと 巴字水

句もあつと三月三日に限る

曲水の形巴の字なり 朗詠ふ

出さるの水成巴字初三日 三

月三日と初三といふ源起周年

後幾霜周年といゆる年月

をい周の世ふとて作せり

周公且洛邑して曲水の宴と始

めりしものなり年月とる

故人家在桃花源直到門前溪

輕舟 春雨コロヨク晴テ解ラ

兩歌 揚林東渡頭 永和三日盃

詩 曲水之詞 王昌齡

夫木 定家

かこあが巴の字あつと

そつとあつとあつと

故人家在桃花源直到門前溪

ハウレイ多クウカノト 遊人過盡

花ヲミルモ子メノトシ 風景

衡門掩獨自凭欄到日斜 夕景

シ流鶯ノタメニ遊ヒ来ル人スギ去リツ

キテワガ家ノカタオリ戸モ戸ガサシテ

尺ヒトリランニヨリ彼レコレトオモヒ

メクラスウチニオホヘス日モタムクナリ

干の處多ク一爰小エ畧以

夫木 家隆

師光

詞 霞はうらぐ春の浪を袖風

の演るは神貝ひびく玉のぬ

俳 遠教善妙獲あむ江戸は子貫十

一月も日も二の候もはは子小康吉

親あむ比目とふすは子小其角

蛤小はまきるははのひ来うる移竹

狂 狂うやびにぬるもは子浮

侍かひゆくねとそりま 常樂菴

三日妙術 今日薺の

花を竈乃上又は

糸の居間小まけむむ一織とさ

ぐく辟くさきり 苦棟の花う

をー花さくハ葉にてもろりて

臥房の下にハ草が發ちること

碎るく 〇今日又ハつあへ辰の日

に芥の花桐の花茶菜と衣服

の中へ入とひんりやじ事さ

面の光沢と出す法 今日桃の花と

採り収め七月七日に雞の血を取

る二味和ー勻へて毎夜うぬぬ

えー三四日ふ至て顔色は今と出

老うもさかく見ゆあかり

三月三日 踏青鞋履 唐士ノ俗
士女子野

一筆破上仕の史の法
辰修尺一 替笏 平

勝之次在 幸 祚意
安 可嘉 可嘉

海魚 二種 鮓之仕の祈
供 雙魚

上巳之俗 位候 上巳
祝 上除之辰

式斗 々々 之 燈 儀 云
幸 標 入 焉

天贖 上中下 壽
供雙魚 上 獻海鱗 申 送溪魚 上

除之辰 申 上巳佳日 田 拔稷 令辰
申 蘭亭會日 幸標入 田 伏乞 鑒

納 申 勿訝 其不 腆

三日 故事 踏青鞋履 唐士ノ俗
遊スル 祈社 女巫水ニ臨ニテ 祓
ヲ云フ シテ 邪病ヲ除キ

福ヲ初ル 風 祓潮 武帝位
俗通ニアリ 二即テ

数年子ナシ 平陽王良家ノ子
ヲ十人余リ 美麗ニシタテ、

カ、ヘヲキ 武帝ノ 霸水ノ上ニ
祓シモフ 飯リニ立ヨリ 玉ヲヤウ

ニセント 漢書ニアリ 其外 祓浴
金堤石壇ナド 皆今日 祓セシ故

多 事 蘭亭 晋ノ王羲之 會
誓山ニテ 詩人文

人ヲ集メテ 酒宴ヲ 催シ 楨ヲ
ナセシトアリ 蘭亭ハ 亭ノ名ニ

油花ト 唐土ニテ 婦女 薺ノ
花ヲ油ニ 点ジテ 祀リ

ヲナシテ 水ノ中ニ 懸テ 三ニ 若
龍鳳花 卉ノ 狀ヲ 示セバ 吉ヲ 得ルトス

近江

石山祭。古来ハ朔日より三日まて日々種々の式法あり

今ハ朔日ハ新宮大明神近津尾八幡宮兩神輿新宮の拜殿ハ出御ありて神樂あり三日兩神輿三十八所明神の拜殿ハ渡御ありて浪徒集りて法樂の奉幣あり御酒と奉りて後神輿還幸あり

粟津祭

江洲鳥居川ハ大友皇子の表と祭る今絶る

京

加茂神事 三月三日あり洛北靜原祭右ふ同

土佐海硯石取

土佐國の海辺ハ三月三日干

海の中の石を取るありこれを硯小作まで至て佳あり

四排

古里ハ古里でハ當時ハ今日

と用也古来ハ二月二日ハ

日五 養生

今日まて物之血を見ること代いじ

京

建仁寺開山忌。高野村祭。修学寺赤山明神まつり

日六 妙術

今日桃花と採てたりハ今日井華水

日七

今日齋。戒沐浴。天氣 今日南風あり

日八

今日南風あり。五穀忌。茶師寺寂勝会

信濃

今日鹿の頭七十五と供す氏人の

大和

今日より七日の間東

京

泉涌寺。開山忌。大坂。住吉大嘗會。天王

日八

今日南風あり。五穀忌。茶師寺寂勝会

三十日 京 長講堂後白河法皇御忌
○大佛蓮華院開帳

四十日 鎮花祭 三輪・狹井・二神
△主生寺大念佛十四日より廿四

京 △善導大師御忌修行あり
日まで本堂の前ぞおぼろぎ念佛を
ほしめあまのくの狂言をつくす

五十日 京 祇園一切経會
△勸學會 康保年
中大内記保胤文道先達の学徒と進

江戸 隅田川木母寺大念佛
梅若奈吉田少將の男入小

欺きて東海小趣と病ふりて死を
塚小町と稱ふ至迄大念佛會を以て居る

○浅草第六天祭 下谷
稻荷祭 ○浅草念佛院中
將姫法會 ○芝鹿島御穂
両社祭礼隔年小執行とる

諸方 ○藝州巖島會
江州比良祭 昔山門領あり故
主日風烈しけまの弥早強し

十六日 黄姑侵種日 天氣 西南の風
軒の下にうけて風とて...
早として其用意をなせたり

忌旅行 今日遠方へ行事あり
無縁終修行 昨十五日より廿
一日迄横州中寺

三月廿六日十九日三十四

親音野崎觀音等參詣廿八日
觀音巖法修行せしむ故なり

不成 江戸
△淺草むん
△ごらの神事

祭礼の年この義を
神輿本堂の遷座法會あり

江戸 淺草三社権現祭
丑卯己未酉戌の

部修行今日より廿七日まで
池上本門寺千

大坂 淨光寺觀音巖法
大龍寺觀音會 摩尼山

人丸御影供 明石にて修行せ

昔の毎月今日内裏の和哥所ふて哥
の御會有る今も和哥好公哥會あり

九京 嗟哉歎御身試の如來の昔
父の牛ふ生と歎と佛果を得ん

為如來と試衣と牛ふもは
より毎年如來と試衣と牛ふもは

諸國弘法大師御影供

大師入定の忌日ふして紀州高野
山ハ勿論京東寺高野とてめ

国々一宗の寺院は法事あり
△高尾女詣常此山女禁制あり

今日よりゆつあつて參詣
群集とる江戸とて川寄大

師河原參 大坂 住吉たが
詣甚多し のの御影

近江 礼拜
講十

二月十三日修行廿四日廿五日と新礼
拜講云敷山大衆の僑奢と歎て

山王大師昇天志のん託宣有て冊
木黄小変守大衆驚き法華八講を

修行一神と升 不成 山城 二の瀬
慰の奉るあり 就日 山の神祭

大和 南都般若 養生 房事と
寺文殊會 飛べし

三月 日合 三月 日合 三月 日合

今日沐浴して身と清く長々神
氣さるるに成て諸病を患へど

八升 近江 比叡山とて山王祭
用ゆる榊とらるる

晦 又炒塞しもかけり茶
人の炉とぬさく之を老

茶湯の法十月より今月晦日限
りて四月朔日より風炉あり

詞 友とらるる。春の名病。
非 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙

京 千本引提寺念佛。堂前
普賢像の櫻あり此花乃

開くと期りて念佛と執行と
此花凡立春より七十五日頃咲く

月令 此部ふの日の定まらるる
三月一ヶ月の定まらるる

順峯入 春大峯山よるこ
順の峯せりんと

本山とて聖護院宮御門主天
台宗より當山といふ醍醐三室

院御門主真言宗より役行者三
十四歳の春葛城を経て熊野を

経て大峯と踏分けぬりと順の
峯入のともやうとて本山の御旧

格より春毎小御代多順の峯
入有之順へ本山より秋を逆

峯といふ本山當山といふぬと
けなまふ事七月の處み記す

非 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大
花之縁 俗説

小三月と婚ぬふ忌むといふ或説
花の淵かりとらるる

あつといふ。詩経小桃之天々其葉
蒸々之子子于歸。桃の花咲く頃

女子と嫁入る事事へ爰と以て見
るに婚礼忌むといふ非なるべし

小弓引 昔内裏小て此事あり
地下にも春の遊びとす

哥 杖結の指も世のうれさふ
妻のあそびぬるこゆをく慈鎮

三月 日合 三月 日合 三月 日合

三月 日合 三月 日合 三月 日合

衣服之正式 綿入と着る

時衣 表白 裏赤 櫻重

裏山吹 表青 裏紅

續後拾遺 為明

女衣服 白と白ちりめん

川 金銀を以て多きなる

と間着 ひんごひんご

の類 さういふ

ら 花のも

り ゆるを

登 ふを

上 つこの式

寒食 明の節前二日といふ

此日 より清明

先祖 の墓所を掃除して祭を

草木 初て生ずる時を以て

の 人

非 を

寒食 東風御柳斜

景 色

火 ア

門 ヲ

詩 全

満街 楊柳緑絲煙

如 ク

リ テ

月天 清明ノ天氣イサギヨ 姪是 ク西ニカキルカ如シ

隔簾花樹動 簾ノ内ヨリ春風花樹ヲ吹キ動

影色ヨシ 女郎撩乱送鞦韆 禁中 ノ女中鞦韆ノ繩ヲ引キ

ノバテ今日ハタハフレアツブシ

寒食 唐士ノ政年 故事 中ノ火ヲ改ル

二榆柳ノ火ヲ用ユ春ハ木夏ハ火ニ属スル故木生火ノ義ヲ以

今日改ルナリ 論語ニ燧ヲ キツテ火ヲ改ムトアリ

子推 春秋ノ時晋ノ文公ニ仕ヘシ介子推トイフ

賢人ノ燒失シ日ナレバト 熟 テ三日ガ間火ヲタツナリ

食 秦ノ人ハ寒食ト云ハズ熟食ト呼ブ火ヲ用ヒズシテ

ヨク食物ヲ熟スルトノ義ナリ 又齊ノ人ハ冷節ト呼ビ禁煙

トモイ 杏粥 束粥 青精 フナリ

飯 青飢飯 桐楊ノ葉ヲトツテ 飯ヲツムレバ青ク光リアリ

コレヲ食ヘバ陽 鞦韆戲 氣ヲタスクトヘ

戲 彩ル繩ヲ木ニカケ架ヲタテ、其上ニ坐シ立テ其繩ヲ引

ウゴカシ 傳燈 アツブシ 漢ノ世ノ政

キヨメテ日暮ニ燭燭ニ新火 ヲ点ジテ近臣等ニ賜フコト

アリコレ 寵恩 拜掃 唐ノ ノ厚キナリ 開元

年中天下ノ士庶ニ勅シテ先 祖ノ丘墓ヲ掃キキヨメテ祭

ルベシトナリフレヨリ此日ニハ 貴賤老弱群集ストイヘリ

時令 此部ノ三月の時侯

小ツク事とのと

暮春 三月十日頃より末と云
三月晦日といひても不替

連吹さらば海より来る春の風 宗祇

けしきもやせむとておと春和歌川 全

能くもよれんれんぞとてさやみかみ 弘永

やまふともいふとてあはれさるる春の鳥

狂 去はれぬるの春のせんぞ 宗の

あふかたのこころをいひてせり 重故

嘉元百首 為実

ふさふさの三月のくま乃あはれ

むとこはささけ月もたのまふ

十首番哥合 寂蓮

あつまらばまのけりへと今夜をり

夏はもはせやよふ川乃山ふみ

詞 けりぬるま今いづくもあはれ

々々のこと 霞 夕のまじりてあはれ

夜 花はらうもあはれぬ 秘にたるる 鶯

古葉に人あはれ春はあはれぬくもあはれ

ふ入花をいひて 入相まのあはれぬ

とあはれ 有明月 三月廿四日のあはれ

あはれ 有明月 三月廿四日のあはれ

あはれ 有明月 三月廿四日のあはれ

あはれ 有明月 三月廿四日のあはれ

あはれ 有明月 三月廿四日のあはれ

あはれ 有明月 三月廿四日のあはれ

あはれ 有明月 三月廿四日のあはれ

あはれ 有明月 三月廿四日のあはれ

あはれ 有明月 三月廿四日のあはれ

あはれ 有明月 三月廿四日のあはれ

あはれ 有明月 三月廿四日のあはれ

詩 陌上暮春 武元衡

青々南陌柳如絲 柳色鶯聲

晚日遲 柳枝夕照 声ノサエツル

何處最傷遊客思 春風三月落

花時 イツレノ外カ遊人ノ思ヒヲ傷

ノ散落スル時ブトナリ

詩 暮春 魏州東亭 岑参

柳鞦韆花復殷 紅亭綠酒送

君還 柳鶯ノ興ヲ催シ花ノクレ

ナイニサキツロヒレ折カラ

君ガカヘリ玉ヲヲスリ 到来面谷愁中

月歸太磻溪夢裏山 面谷磻溪

川ヲ云旅ノモノウ 簾前春色應

須惜世上浮名好是間 春氣色

斷對君衫袖淚痕斑 君ヲ送別

卿ノ方ヲ望ミヤレバ一カタナラズ故

鄉ノコヒシク君ノワカレニ衫袖モナ

三ダニシホリアヘナルナリ

啼鳥春將盡 誰知心裏恨

落花雨未晴 已過夢中春

欲盡花香滿衣巾 鳥空啼

如流春色催詩賦 坐情春

詩 全七字對句 詩礎

洞庭春盡水如天 蝶怨風

杓嶺瘴來雲似墨 愁暮天

廣武城邊逢暮春 汶陽歸客淚

沾巾 暮春ノ頃故郷ヘカヘ

鳥揚柳青々 渡水人 暮春ノ景

色ヲカタトリ出タ花落ツキテ山

ノ鳥声モモノサビシク柳色ヲ

クヘテ水辺ヲワタリユク

人ノナゴリヲラシム

惜春 春の限 夏り久

東海もく終るをいひて

運 晴ちもあまをそかた

春湊 春のあけをいひて

三月 待令 三月

三月 待令 三月

三月 待令 三月

あつちるももさう

新古今、寂蓮

春の日の暮のほろろとぬるも
春の日はあつちるももさう

三月盡 三月晦日とつて
一日ふりださう

哥 哥苑抄 行尊
春の日はあつちるももさう

夫木 唯残半日春 千里
一年のまよとこふもさう

日 雨処春光同日盡 千里
春の日はあつちるももさう

詞 春の日はあつちるももさう
春の日はあつちるももさう

花のまよとこふもさう
春の日はあつちるももさう

連 春の日はあつちるももさう

非 雨の日はあつちるももさう

詩 三月盡之詞 唐 韓偓

樹頭初日照 西簷樹底 落花夜

雨沾 朝日ハ花ニウツロニキヲテ
ラレタヘノアマニテ樹下ウ

後堂欄檻見垂簾 外ノ戸ヲアテ
ルヲトスレバ入

戸風斜倚 榆英堆 墻水平 淹

張在 季年三月病 懨々 今ヤ三
月ノ名

愈サルゾモノイトハレキニシ

三月 晴令
今孤楚

小苑鶯歌 敬長門蝶舞 多鶯モ

蝶ノトビカフ時ハ春スニ暮ルハ
ニ至リ長門宮モ物サビシキツ

眼看春又去 翠輦不曾過 行幸

ナク御クルモノトホリスクルモノナク
今年ノ春モアダニクレケドモ行幸

ノサタモユグ君ノメグミヨ
ウケヌヲナケキタルナリ

詩 全 賈島

三月正當三十日 風光別我苦

吟身 三月晦日ナレバ今夜バカ
リノ春ヲ惜ニルナリ 共

君今夜不須眠 未到曉鐘猶是

春 余リ名残ヲシケバ今夜ハ眠
ヲセシ曉ノ鐘ニデハ未春ナク

忘 霜 立春の節より八十夜

をぬれ霜ふる事也故ふ三月中
四月節とのあつとすれ霜と云

草木 此部より三月一ヶ月の
草木とて集めのもの

花 古昔ハ梅ハ定る一枝開天下
皆春を、詩ヲ用とも梅の

花とつゝ〇中世も梅の、花と

つゝ〇一説又和哥より花と

つゝ〇往昔より櫻の事とつゝ

櫻 夢見草、あじろ草、吉野草
かき草、曙草、尋見草

中華にて此花を、櫻木と

いふものあまも、楮、楮の類

ふして賞翫するものありあつど

或いは櫻桃を以てさういふもの

ども本草と考ふ、櫻桃ハ今の

ゆす、梅さう、朝鮮ハ此花を

と中古来聘の時此花諸方み

多くあると見て、の聘使の朝鮮

人等甚だこれを愛翫せり、海棠

の異類ふして、の望土のたひ

その花の美なる事本朝の外にた
くのみさきと見へく此唐人
にも能く知る事宋景濂が詩
あり末に載る

○夫木 野外花 家隆

梅より志をあげんさうたるの
時日りのかゝるももらうらぬ

同 庭一櫻 仲正

かゝらや約もむねぬあはれさの
庭もせみさくさくさうらぬ

詞白文 嘆らる梅よ ○雲

雨をよむとて鳥 鶺鴒の
鳥 鶺鴒の林の胡蝶

世 竹の影をさす 都の人の
世 竹の影をさす 都の人の

禁中 山人の心 山里の
禁中 山人の心 山里の

夜 人の心 山人の心 山里の
夜 人の心 山人の心 山里の

忘 人の心 山人の心 山里の
忘 人の心 山人の心 山里の

夜 人の心 山人の心 山里の
夜 人の心 山人の心 山里の

忘 人の心 山人の心 山里の
忘 人の心 山人の心 山里の

夜 人の心 山人の心 山里の
夜 人の心 山人の心 山里の

忘 人の心 山人の心 山里の
忘 人の心 山人の心 山里の

夜 人の心 山人の心 山里の
夜 人の心 山人の心 山里の

忘 人の心 山人の心 山里の
忘 人の心 山人の心 山里の

○哥連俳句法

○前のついでとて櫻と櫻と
櫻の事をしる和哥より花の

題小櫻と詠じてもくはしむ
櫻の題よりさうしてむ事し

○連俳より子細ありて櫻乃
句の花の句ありさうして附

句小も花よさうして付事
いあれも櫻の句小花の句

付事し但し櫻を以て正花と
さうして事格外の傳あり

さうして事格外の傳あり

○非諧正花非正花大畧

○正花本植物春小成分三句まり
 △花の淵△花の浪△花の霞△花の雪
 △花吹雪△花の空△花回△花籠
 △花鏡△花籠△花びら△花とる
 △花窓△花守△花の友△花の主△花
 の宿△花車△花とさ△花軍△花入
 △生花△花の宴△花島△花の春
 △年の花△花の夜△花をた△花を
 ○廣美の正花春二句まり
 △花の心△花の血△花の縁△花の聲
 △花嫁△花衣△花の袖△花乃衣
 △花の影△花のや△花のま△花の
 △花のろ△花の髪△花の心△花の
 ○他季の正花本植物
 △花摘△花心△花葉の心△夏心
 △氷室の玉△花のゆ△花の心△花の
 △花の心△花の心△花の心△花の心
 ○雑の正花 植物二句まり

○むらりて、灯の心。花の心。花の心。
 花の心。花の心。花の心。花の心。

○正花よ何れを植物れありさる分

右の大畧を奉ぐ餘准之句作有べし

○花の心。花の心。花の心。花の心。

○花の心。花の心。花の心。花の心。

○花の心。花の心。花の心。花の心。

○花の心。花の心。花の心。花の心。

○花の心。花の心。花の心。花の心。

○花の心。花の心。花の心。花の心。

○花の心。花の心。花の心。花の心。

骸骨の上を踏こゝあはれなる鬼貫
月をの味や忍節何乃友立圃
獨ふも昔藤子や花さうり移竹
親身は仰ふあゝと花盛宗阿
若持山世上の花のさゝの淡々
狂西方に浄土のまゐるさゝの
花をていつれもこりやいふ山真柳
人毎に櫻折さうとさみおれて
あゝと梅を枝さうとほはる長鬚
さゝのさゝさゝの枝うら白ひら
以上さゝのの花
のかさう行風

詩 櫻之詞 明 宋景濂

賞櫻日本盛於唐如彼牡丹

兼海棠 日本ニテ櫻ヲ尚美
スル一唐モオヨバヤ

其ハナハタシキ一牡丹ニ海棠
ヲソエタルカゴトシ唐ニハコト
サクラナリ恐是趙昌所難畫

趙昌ハ画ノ上手ナレモ 春風總

起雪吹香 白キサクラノ句ヒ

思ハルトナリ 發々タルガ雪ヨ

詩 櫻五字對句 同上

名花経千歳 花白交梅樹

奇種開五方 枝垂對柳絲

詩 同七字對句 詩礎

芳野寒光千里雪 第一花

嵐山春色九重雲 白櫻開

花如解語迎人笑 因花醉

草不知名隨意生 山着色

詩 催花見文 真學尺牘アリ

春山百花 満開

修家浄室之花只今今盛

吟容成群 不失時以

之遊人 爲市 嬉々

共暢 觴 詠之懷

中不致 内 汚 彼 尸 夜 仇

同 駕 怡々

名 存 立 上 可 爲 怡 悦 以

尺 牘 書 啓 上 中 下

春山 勝地 勝境 芳嶺 百花 名花

催花 満開 爛熳 明眉 吟客 遊子

騷客 逸人 作群 雲集 奔騰 絡繹

不失時 未 辭 枝 不 後 時 共 暢 云

上 侍 吟 筵 中 將 野 飲 同 駕 催 趣

行 馳 携 手 同 歩 怡 々 欣 躍 歡 趨

櫻 田 吉 野 櫻 の 苗 を 植 る 夫

と 櫻 田 と い へ ば

建 保 百 首 光 明 寺 詩

山 凡 の 名 吹 ぬ る と さ くら 田 の

苗 代 水 を 花 ぞ ぞ 花 川

山 櫻 山 中 小 多 一 花 白 色 草

辨 也 早 く 開 く 品 類 多

哥 家 集 定 朝

る あり 立 ち かく 道 ば や ち 櫻

花 の 志 向 け け ぞ ば り ぬ ぬ

非 茶 り ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ 其 角

家 櫻 人 家 小 あり 櫻 と い へ ば

狂 一 面 々 咲 け じ ぬ 表

の 見 家 家 法 今 の 家 櫻 哉 満 水

非 さ う 今 今 今 今 今 今 立 圃

庭 櫻 新 撰 六 帖 知 家

庭 見 せ 小 櫻 櫻 の 咲 け ぬ ぬ ぬ

○ 以 上 三 つ の 櫻 の 名 木 小 あり ぬ ぬ

家 小 あり 庭 あり ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

○ 次 不 記 せ ぬ 名 木 早 二 月 の 部 有

八 重 櫻 昔 南 都 の 有 今 今

夷 々 右 哥 伊 勢 大 補

あ へ の 名 今 今 の 部 の 八 重 櫻

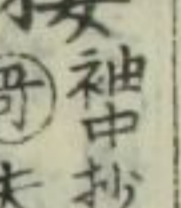
々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

哥 文應百首 為家


うつろくする神のまじりの八重桜
去の月とけあふりしはかな

犬櫻  木葉常の櫻と同
小花穂とす山多

狂 狂言て本は海に盗人の
用心もくた女揃りか 貞宿


渦櫻  神中抄云唐鞆の雲珠似
哥 夫木 定家

そやいさのさるるうみさう
くはのふまさけるるるどし

樺櫻  花樺茶色之故不野々
又別名を本あり

是の檜物ユ多く用るのあり
哥 新六帖 為家

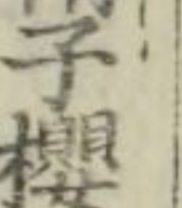
梓弓矢都の里のかを櫻
花小のそりるあころるる


遅櫻  色少紅く諸花不
後青葉隠れ

味 四月新樹かくも合と事あり
草菴 頓阿

あうとせはををいそるのど
おきて咲る花と見まや

連 りぬをふとをてまはほ福
非 かくぬをふとをてまはほ福


烏帽子櫻  非 花がめははる
帽子さうさ如水

小櫻  花と母色密あうて
咲鑑の小櫻威と

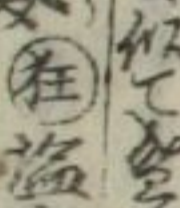
つゝ物此花乃色ふかざりしく
非 小桜の花咲あや具足親重寛

伊勢櫻  花濃紫色小
赤一花瓣の

中の元白いせし名はるると説多
非 依保妃と秘系えいせ桜 重以

普賢象櫻  花千瓣
淡色と

帯の花中二の細葉出象鼻のど
非 象鼻に似てさうさるるる象鼻重

塩竈櫻  在塩竈のあさひの著る
桜朝之屋様小せん 三哲

緋櫻 小輪て莖長く其葉甚だ赤し
新撰六帖 光俊

夕附日掃ふ言やほろろん
る根よまろひさくらの花

楊貴妃櫻 車辦はて中輪あり

狂楊貴妃のつれづれはほろろく
天のをやうなる橋をかりり貞清親王

流の外 墨江櫻 江戸櫻 西行櫻
合鹿尾櫻 浅黄櫻 雲井櫻 有明

櫻 滝櫻 委いり本篇博物
茎小名木并ふ花形くじしくのそ

花笠 花かごとててそ
似合ん人の流 其角

花は雪 大伴のむさうむ
らん花の雪 全

花見酒 能徳利ねんじり
や花あふそそ 全

右いりきも花ふすそへそろり
委いり此三丁め の所あり

尋花 新千載 津守国助
はよふそいつかりあうらふ

梯を伝ふりてゆりぬ目をきた
家集 泊舟尋花 西行

漕出てたりの沖みえそそ
まことひりもさうねあそそ

花盛 徒然草に立春の後七十
五日と期とひらう有

れも今甚早一口の二丁め五
丁め小花盛の時をいらす

永花百首 為重
秘ろりそれえろそそあそそ

あそそい花の目ねろろろ
能 志死わろ人の回分や花盛う桃室

撒とろ又あそそけろろ波文
大和路の禊をわろそそ花盛淡々
山や花垣振くの酒をや 亀洞
雪山
狂 香森の扇乃風もよめてい
今とそそろは花見酒は宗恒

風卷落花輕 惜花風起頻

詩 七字對句 詩礎

細柳擁壇人迹絕 落照春

落花沉澗水流香 且落花

落花寂々啼山鳥 覆地多

楊柳青青渡水人 踏落花

惜花化 花小對之命小もあつる

後拾 能宣

楊花白く名残小大かきさる

夫木 雅經

をわらふとむらさきあふのせれ

根はくさる。身よあまらさうあま

折れたむとさむ。あつるをさむ。

香あつるくふ。風いよ。清ひゆく。

惜花之詞 唐彦謙

紛々後此見花残 今ハ三月ノ

人間毛長命ノ者ハスクナキゾ

車覚長繩繫日難 今日ガ本

来リ光陰矢ノ如クナレバ早老人

ギトメルハ 樓上有愁春不浅小

桃風雪凭闌干 闌干ニヨリテ小

三ノ九

桃ノ風雪ヲ見テ春ノ
去レテ惜メバ愁浅カラズ

残花 春はらう残る花といふ
夫木 入道太政大臣

詞 △名残の花 △青葉乃花。
梢ののこる。凡より後たづひる

詩 殘花之詞 唐 崔惠童

一月主人笑幾回相逢相值且

街杯 主人家ニ在リテ笑ヒ樂シム
コト一月ノ中何ホドカアルカ

ヤウニ偶茶會ニ夕時話
リテウサヲ忘レ酒ヲ吞レヨ 眼看春

色如流水今日殘花昨日開
光

ノウツリカハルハ水ノ流レテト
ルナキガゴトク昨日ノ花サカリ

ハ今日ハヤ落キル然レバ酒ヲ
ミタノシムテスゴサレヨイフ

詩 殘花五字對句

枝上三分落 山齋鳴過雨
アメヲト

園中一寸深澗對落殘花

詩 同七字對句 詩礎

好鳥鳴春歌後院 看殘花

飛花送酒舞前筵 眼偏明

短砌雨餘芳艸合 照殘花

小亭颯旋落花疎 色猶深

海棠 △かきま △移るる花
異名 花仙の唐おもえり

海外より來る花ゆへ海棠と名づく

非海棠の花のうらやまの月其角

海棠や蝶の舞を月とよみ紅

詩 海棠之詞 明 張新

雨滋霞靨入朱顏 雨ニヒトシホ
花ノ色香ヲ

ニタトヘタリ 月下疑後姑射

還カハル月カゲニナガムルハ姑射モトモ最
山ノ仙境ニ似タリ

是春工多巧思著將色在淺深
間ニ春ノ造化ノ夕夕ニ種々ノ妙
アリテ蒼ニ淺深ノ丸々キ色アリ

蜀彩淡搖拽弱質不禁露
蜀シヨク彩淡搖拽弱質不禁露

吳粧低然思幽懷欲訴風
吳コ粧低然思幽懷欲訴風

望中落日青絲騎箔外風
望バシ中落日青絲騎箔外風

夢裏東風瓊樹枝舞蝶飛
夢ム裏東風瓊樹枝舞蝶飛

海棠クハキタセシ花中仙ワウセウ花譜
海棠クハキタセシ花中仙ワウセウ花譜

花中仙クハキタセシ王禹ウ稱セウ花譜
花中仙クハキタセシ王禹ウ稱セウ花譜

海棠クハキタセシ花中仙ワウセウ花譜
海棠クハキタセシ花中仙ワウセウ花譜

花中仙クハキタセシ王禹ウ稱セウ花譜
花中仙クハキタセシ王禹ウ稱セウ花譜

海棠クハキタセシ花中仙ワウセウ花譜
海棠クハキタセシ花中仙ワウセウ花譜

花中仙クハキタセシ王禹ウ稱セウ花譜
花中仙クハキタセシ王禹ウ稱セウ花譜

海棠クハキタセシ花中仙ワウセウ花譜
海棠クハキタセシ花中仙ワウセウ花譜

五ツアリ一ニハ鱗魚キモノ
五ツアリ一ニハ鱗魚キモノ

ナレホ胃多シニハ金橘モヨ
ナレホ胃多シニハ金橘モヨ

キモノナレホ酸キヲ疵トスニニ
キモノナレホ酸キヲ疵トスニニ

ハ蓴菜ユンサイ賞ウツクシ詭ウツクシナルモノナレトモ
ハ蓴菜ユンサイ賞ウツクシ詭ウツクシナルモノナレトモ

性冷ナリ四ニハ海棠キモノ美花ナレ
性冷ナリ四ニハ海棠キモノ美花ナレ

トモ香ニヒナキヲ如何ン五ニハ
トモ香ニヒナキヲ如何ン五ニハ

我が嬌ヒメ子詩ヲ作ルコト能ハサル
我が嬌ヒメ子詩ヲ作ルコト能ハサル

コノ五ノ事吾カ恨トイヘリ
コノ五ノ事吾カ恨トイヘリ

睡花スミ唐の玄宗皇帝大真妃
睡花スミ唐の玄宗皇帝大真妃

白輪海棠花白く
白輪海棠花白く

桃花トウ三千代草御酒古草
桃花トウ三千代草御酒古草

異名姐シメ挑チウ助ス嬌キウ
異名姐シメ挑チウ助ス嬌キウ

異名仙セン木キ蟠パン挑チウ引イン客キヤク
異名仙セン木キ蟠パン挑チウ引イン客キヤク

異名三サン倫リン五ゴ渡ト阿ア陽ヤウ花カ碧ヒキ石シキ挑チウ
異名三サン倫リン五ゴ渡ト阿ア陽ヤウ花カ碧ヒキ石シキ挑チウ

異名招ショウ挑チウ柳リウ即キツ花カ陌ハク上ジョウ花カ桃トウ林リン
異名招ショウ挑チウ柳リウ即キツ花カ陌ハク上ジョウ花カ桃トウ林リン

夫木遙見桃花 俊頼

① 夫木遙見桃花 俊頼
誰々又々そあがらん山が川の
その乃桃の花のそをりそ

② 藏王 三千代草
々々々々のあつてのむんや
二ふとのまねた名よいとらん

詞 春風 夕日 夕日 夕日 夕日
生の桃 夕日 夕日 夕日 夕日

③ 未芽世にやうめ 雲の桃 紹巴
連 花の今日 是雨くあり 雲の桃

④ 飛小来てまきて 峯の桃 移竹
非 花の桃やあまの桃 紹巴 其角

⑤ 獨有成蹊處 穠華發井傍 清水
二桃華アリ人ヲ不召トイヘトモ人
花ヲ慕フテ来リ自ラ踐テキル

⑥ 山風凝笑臉 朝露涼啼粧 桃花
ハ美

人ニ似タリ風ニ逆ヘハ笑フ如ク 如ク 隱士
シ露ヲ受レバ涕ニ似タリ 隱士

⑦ 顔應啟仙人路 漸長 隱者モ桃花
ヲ改テ喜ヒ咲ヒ仙人モ雷ヲ見レハ顔
リ見テ路ヲ行クヲツシ 還欣上

⑧ 林苑千歲奉君王 宮中ノ桃花ヲ
ヲ祝スルナリ

⑨ 千朶穠芳倚樹斜 一枝枝綴乱
紅霞 桃樹ノ千朶斜ニノビテ花ハ
ケルヲ 緋ノ 憑君莫厭臨風看占

⑩ 斷春光 是此花 春風ニ乘ノ桃
ナシ春光ハ桃花ヨリ外ニハナシ

⑪ 種竹交加翠 松葉疎開徑
種竹ノ交加ニ翠 松葉ノ疎開ニ徑

⑫ 植桃爛侵紅 桃花密映津
植桃ノ爛侵ニ紅 桃花ノ密映ニ津

⑬ 同七字對句 詩礎

桃花氣暖眼自醉種桃年

春渚日落夢相牽深淺粧

五夜漏聲催曉箭紅欲然

九重春色醉仙桃滿澗香

桃 王母獻桃 漢書二載武

鳥來リテ帝ノ前ニ止ル東方

王母來リテ桃ヲ奉ル此桃

三千年ニ一度實ノル仙家ノ

豎子此桃ヲ三度偷ミ食ヘ

二東方朔八九千歳ニ云ヒ習セリ桃

桃之 漢ノ代ニ劉阮ト

テ茶ヲ採ル路ニフミヨヒテ

尺ハカリナル所ヲワタリ又

一ツノ山ヲ越ケル時二人ノ女

ヲ見ル容顏極メテ妙ナルガ

武陵源 武陵ト云所ニ魚

或ル大家ニ男女有テ彼ノ

雲フ我等ハ秦ノ世ノ乱ヲ

クルツレヨリレテ世間ニ出子

ハ年數モ覺ヘズサルホドニツ

レヨリ何代ヲ歴タルツト問
 フ秦ヨリ魏ニ移リ晋ニ代
 リテ選カニ年代久シキコト
 ナレバ漁者モ大ニ心アヤシ
 帰リテ此由ヲ太守へ申上
 ルニツキ太守ヨリ漁者ニ人
 ヲツヘテカノ前ノ大家ノア
 リシトコロヘユキ再ビ尋子サ
 セラレケレドモ其アルトコロヲ
 知ラズ尋テ路ニフミマヨヒ
 辛フシテ空エシ

玄都觀

劉禹錫ガ詩アリテ玄都觀
 ニ桃千樹栽シトイヘリ

桃源平志桃白
 品赤入輪
 殘雪桃白
 八重大輪
 緋桃八重

緋桃之詞

短牆荒園四無隣
 烈火緋桃

照地春古城ノ荒園野中ニア

坐久好風休掩袂
 夜來微

雨已沾巾桃葉受風美人ノ袂

敢同俗態期青眼

似有微詞動絳唇桃花ノ孔容

盡日更無

鄉井念此時何必見秦人終日

李花異名東苑道傍

新撰帖為家

詞行山陰山陰ノ風もさかぬ

庭榭のこもり花咲かたり

まきぐせふ雪く刃るるを山榭乃

三月草
毛落さかたふ雪くせ見んか

詩 李之詞 唐太宗

毛櫛流桂圍成蹊正可尋日夜

谷道ヲワケケケカケ 鶯啼密葉外蝶戲カケ

晚花心蝶ハタクハ咲ノ花ニ戯レ

李在獨來教愁情相與懸李在

道ヲイク度モメグリテ 自明無ナクサレ心ノウレハレヌ

月夜強笑欲風天 巷ノ白キニヤミナレトモ

減粉與園籜テアカレ心ヲ取ナラシムハシ笑フ 分香沾渚蓮徐タカレカレ風ニテ花ハチルニイカ

妃久已嫁猶自玉為鈿美人ニ

詩 李五字對句 同上

園裡送明月 葉暗青房脫ハクラフンセイバウダツレ

林頭宿白雲 花明玉井春ハナフキフカニキヨクセインハル

詩 李七字對句 詩破

近紅暮看失燕脂 自無言オツカラナレコト

遠白霄明雪色奇 李花香リクハカフバシ

石筍街中却歸去 花落時ハナヲツルトキ

果園坊裡為求來 白玉堆ハクキヨクタクタカ

楊梅花 花の早く花咲葉ヤハツクハハナハナハナハナ

実のうす松りしくいふ木立ヤハツクハハナハナハナハナ

○実の大いさふやど味まひオノオノオノオノオノ

杏アヲ花ハナ 新撰六帖 衣笠内大臣アヲハナ

よほして白ひそちくん月アヲハナ

家園あふぬくりの花アヲハナ

詞 ぬいぞをのぬく白ひアヲハナ

のぐなふぬぬぬぬぬぬアヲハナ

非 まごころい何のあふたのさ貞徳

詩 杏之詞 唐 温憲

團雪上晴梢紅明映碧空 白雪

ノ梢ニカ、リ 杏苞 店香風起夜

夜ル風吹テ店カンバシ 村白雨休朝

至テ見レハ一村雪ト成レリ 静落

猶和蒂繁開正蔽條 夜雪杏

テ花蒂ニ並ヒ恰モ杏花ノ 淡然間

賞久無以那嬌饒 静ニ居テ杏

賞玩スレハ飽キ足ルコトハナシ

詩 全 薛能

手中移得近青樓 枝ヲ折テ書

活色生香第一流 杏花ノ色白ク

誰知艷性終相負乱向春風笑

不休 杏花美ナリトイハレ妓ニ近

暖酷松葉嬾 晚色連荒轍

寒粥杏花香 低陰覆樹碑

詩 杏七字對句 詩礎

忽憶華時頻銘酌 杏間遙

却尋醉處重徘徊 湿胭脂

寂々孤鶯啼杏園 獨含晴

寥々一犬吠桃源 已續翻

杏之 碎錦坊 斐晋公午橋ト云

坊ト名ヅク 葡萄花

林檎花 名 斐 文林郎

棗花 大小二種あり

梨花

異名 清艶 凝妝 玉骨
種類 △棠梨花 野山に生る

浦梨の花 人の前とて伊勢の名所なりよて
妻はの花 卅九丁より三秋の

夫木

為家

少くもる侍とてさるれさあ
枝みかたれり山梨のりさる

詞 移りよ。えさぬ。さひゆふたひ
ささくは心。彩のさきさき。あろき。

生けくま。素さし。梨空。ま
ろけをば。風かろ。咲そふ。あろ香

運 雨や夕行ふさの類さあ。月相
非 梨は心本ぬさく。あれさる嵐式

秋の花さくは。尼は念解きて言水
あろはのさくは。梨は心本ぬさる鬼貫

詩

梨花之詞

劉商

露冕行春向若耶野人懷惠欲

移家 若耶公儀御用ノ梨多シ
官人春行テ梨花ノ豊年

ヲ見ル民家尤ウルヘリ近辺ノ野
人其恩惠ヲ思フテ家ヲ移シテ

来ント 東風二月淮陰郡唯見棠

李一樹花

淮陰ノ辺ハ古ヨリ梨樹
多シト本アル家ハ大名

トヒトシト
云傳ヘリ

詩

丘為

冷艶全欺雪餘香乍入衣

ウルハシキコ白雪ヲ欺テホコルニ似タ
リ其香氣餘分ニ多シテ人ノ衣

服ニウ 春風且無定吹向玉階

飛 梨花が春風ニ吹カレテ玉階ニ
向フテ飛ブト云フヲ以テ新臣

無功ニノ恩惠ヲ蒙ルリ
天子ニ近クト云ニ喻テ云ル

木瓜花

非 木瓜のさみ花

狂 惟ふ若松のて木瓜のささる
悟 やえさるささるのささる蝶鼓

木蓮花

非 けさる花の好や
蘭 木蓮を花井

胡桃花

夫木くればさるげさく
くるものそえあひを

救多つゝこのね
そかあつゝ知家

辛夷

木筆 迎春 侯桃
紫菀 紅燭

△四手とぬも 別ふ重ふ花咲あり形
幣のじ故ふあてふと云

素方さそ 虫梅しうこの水
かせむとそかげくこあふ為家

俳 素夷うれ本はむこころ文舟
蜻々やふぬはれふの森市隠

詩 辛夷之詞

崔迪

緑堤春艸合 王孫留玩 春ノ

クサヲツムトテレキ 況ヤ 有辛夷花

時 興芙蓉乱 サカリニテ水ノ

ヲモノハスノ花トヒトツニミダレアイ

タルケレキヒトレホヲモレロク奥ア

躑躅

山石榴 羊躑躅
△火丸草

家集 躑躅為山光 西行

はくさく山のいさひゆへえて
とくさくその名のこまけり

詞 白のそえの色 咲白つと

はくさく海辺 かもよのうら 浪
はくさく 岩のほろい 山

路のつと野 松のまつと 宋人
おまお 駒のけこまおまお

夕月をこれ 夜 ぬの夜もこころの色
娘の神上は ぼくが 萩のまつと

小つと ちりつと ちりつと
だんのほろい 雲はつと

連 ちりつと ちりつと ちりつと 宗因
俳 小鳥居の素子の神のつと 山其角

狂 笑花の歌い上戸のつと 丹解
名い下戸のすくもつと 未得

詩 宣城見杜鵑花 李白

蜀國曾聞子規鳥 子規一名八杜 鶴和名ホト

ギス唐ニテハ三 宣城還見杜鵑

花 杜鵑鳥啼ニ聞テモノサビシク 思フニ又杜鵑花ヲ見ルニモ古御

出ス一叫一回腸一断 鳥ヤ花

三月憶三巴 三春ニテ三月ニナレ 氏春ニタノレニ今

此所ヨリ三巴ガ見ユ

レバクミク古御ヲ思フ

詩 杜鵑花之詞 張籍

五渡溪頭躑躅紅 タニホトリニ アカキ

花サ 嵩陽寺裡講時鐘 山寺 講時

カ子キヘル山中 春山處々行應

好一月看花到幾峰 春ノ山路 ハイツクヘ

往モ花見事ニアルヘレ一月ノ内毎日 花ヲ見アルカバ幾ツノ峯ニカ到ラント

オモヒヤリタルナリ

躑躅 姪 非 垣乃々 傍も 親

品類 姪 くや 娘つじ 一貫

半躑躅 吉野ニ多ク遠く 見せる蓮花の如

花黄 哥よ 岩つと 光俊

我高の谷ひうひるる岩つと

映山紅 葉少ク圓ク花赤

花と開くそ尤き 赤花の 園あり

或ハ白花の物あり

豊映 白雪ニナリ 中アハヤ

山紅 白く丸くあつまり咲く

紅きれ咲 江戸万葉ハ重う

すいろ大アハ ハツク 紫大

アハ はろがのうす

あは 小アハさがる

○峯の松風 雲井赤

白紫 八重大アハ

○櫻川さくらさくら中里ん○
あけ雪。白小アアん ○花車。む

ささ大アアんきれ咲 ○志やむ
ろ。白むくされ飛入ささ大アアん

藤 紫藤ささ藤ささくー花
松見草 二季草

哥 家集 橋上藤花 顯季

うすくくのさく白くさくえきを
とれめくーいけ、ふあふさ

貞應百首 藤花始綻 為家

初まのかくまふくはふらふら
くえんえさくむれたどのうく松

詞 ぶびく。ちる。咲。白く。う。れ。

浦田子れく。夜。た。さ。さ。の。夜。さ。ん

白く。池。池。の。夜。派。新。う。つ。る。は。派。さ

夜。ふ。も。さ。り。野。春。日。群。ふ。ち。舟

さ。り。松。里。の。夜。波。赤。子。せ。く。る。派

け。夜。さ。る。松。風。と。れ。れ。松。も。喜。や。初。る。

松。の。さ。さ。り。は。さ。さ。り。風。白。く。ぶ。びく

松。風 由。録 ゆ。く。り。は。色。夜。は。赤。く。は。り。う。く

の。大。川。の。さ。乃。夜。さ。さ。夜。さ。さ。さ。さ

本。あ。ま。さ。く。雲。の。ま。他。池。の。夜。さ。さ

さ。さ。も。は。り。新。う。つ。る。夜。が。枝。夜。つ。さ。さ

く。夜。夜。さ。夜。夜。の。丸。さ。さ。夜

連。夜。派。さ。さ。さ。の。白。く。さ。昌。比

排。白。夜。と。砂。味。さ。り。舟。さ。さ。か。其。角

長。く。し。の。夜。も。さ。さ。り。夜。一。圃

白。夜。も。風。は。吹。き。夫。乃。川 宗阿

夜。さ。さ。り。さ。さ。さ。さ。さ。さ。如。泉

狂。紫。の。ぬ。く。い。け。さ。り。夜。の。さ。さ

松。れ。さ。さ。り。と。さ。れ。て。は。け。れ。真。徳

詩 紫藤之詞 許渾

緑。蔓。穠。陰。紫。袖。低。客。来。留。坐

小。堂。西 色。ノ。振。袖。如。シ。見。物。ノ。客
来。リ。番。ツ。テ。去。ラ。ス 醉。中。掩。瑟。無。人。會。家
近。江。南。卷。画。溪 小。堂。ノ。西。ニ。ハ。客。来
不。来。我 小。堂。ノ。中。ニ。テ。瑟。ヲ。ヒ。キ。テ
夕。ノ。レ。リ。且。堂。中。ノ。景。色。ハ。江。南。ノ

三月 草才
美溪ウツリテヨシ

詩 藤花五字對句

野衣裁薜荔松石備空古

山酒醉藤花 藤花不計年

詩 全七字對句

詩 礎

長蔓纏來山徑樹 碧侵衣

無花拂盡石橋苔 花無枝

仙人碁局埋幽艸 留美人

開士禪扉閉古藤 院隔橋

妙術 藤の花長く見事小開法

藤の根へ酒とかけ或いは酒の糟と入るへへ藤能くなく花

長く美しく咲かり扱花咲て 後英の下へ盃小酒を入三寸程

あいでとあけて次第に盃をさちちるる花長く見事咲

月季花 日月紅 不断た

より長春の名あり然まを春りとも花多し殊小春と

詩 月季花之詞 宋 韓琦

牡丹殊絶委春风 籬菊蕭疎

怨晚叢 牡丹ノ春風ニナヒキ 何似

此花栄艶足四時 常放淺深紅

櫻長春 木ハセウヒ花ハ八重 咲出へ白く次第

以赤 七白長春 一重本内志

三月 草才

石楠花 唐人の詩にもあり
葉はらんとしうげ母

似たり 詞 鹿山 分合 峯 小名
飯山 篠 なる乃山人 大峯 俊の

非 山 京 なるこそすれ 猫 頼高
香 春 是 とう 木

沉丁花 瑞香 春 是 とう 木
睡 香 い 能 活 と

高 三四尺 花 丁香 如くありて
紫 既 小 開 け 淡 紫 と なる

非 竹 垣 を 庭 の さ め け せ ば せ
狂 竹 垣 を 庭 の さ め け せ ば せ

白ひをとむ 山吹 順の和名
沉丁花 未得 抄 小 款 冬

この字と書く 朗詠集に公任
卿も此字を用ひ給ふ 本朝にて

これよとて 山吹 本草と
以て見る時 秋 冬 といふ 臺

の事 正字 棟棠 異名 醉
醜花 玉 盞 銀 葩 春 紀 念 草 鏡

草 面 影 草 菊の花は黄色と
本色と 山吹の花は白さと 正

色と 寸良峯の宗貞 山吹の
花 衣 衣 たるや ねん とも なる

ら なる 又 山吹 此 奇 なる 花 を
と あり 又 山吹 此 奇 なる 花 を

い なる 山吹 此 奇 なる 花 を
花 咲 此 歌 によりて 山吹 を よ

み 合 意 たる 黄色 の 事 なる

定家 家集

枝 うち なる 山吹 此 奇 なる 花 を
こ の 山吹 此 奇 なる 花 を

詞 山吹 此 奇 なる 花 を
山吹 此 奇 なる 花 を

山吹 此 奇 なる 花 を
山吹 此 奇 なる 花 を

山吹 此 奇 なる 花 を
山吹 此 奇 なる 花 を

山吹 此 奇 なる 花 を
山吹 此 奇 なる 花 を

山吹 此 奇 なる 花 を
山吹 此 奇 なる 花 を

東菊 花菊小似 淡紫色 **栴花** 花梅小似

櫻草  種類数多あり ○鞍馬さくら草

いろ少 ○紅裏 表より薄色より紅紫あり ○濃紫 ○咲くは紅白とひ入 ○紅軸

濃紫白抽 ○源 **旌節草** △九輪草 △七重草

氏薄紫 少 **海老根** △化偷州 名山宇波良

○櫻草小似て花 **荒世伊登宇花** 花ごとく紫あり

丁子草花 葉拵小似て花丁子のごとく浅葱色

仙臺菡 菡小似て花黄へ首宿 草へ大和本草小

華鬘草 花形クニと化 草小似たり

碎米薺 蓮華花。五形ともかく 俗小△ひん若花といふ

母子草 鼠麴 米麴 鼠耳 茸母 黄蒿 香茅

妙術 治痰嗽術 母子草の花

小粉團花 花の形粉團花小等 一くしてらひさし

馬酔木花 三才圖会云能繁茂と 高さの二三丈山谷

亦有春小白花さき **蘇枋花** 馬此葉を喰酢云

紫荊花 赤色と深木といひ別

荷花紫艸 能根とやれはるく 中や若草

白茅 △茅花 花の形白又と接ぎ列 根と美蘭根と云

哥 漸乃のへろま生れつる根と云て ちをひきもかきほりしせん知家

詞 生のたつづき流るるをよ。あは生
非 迷ひ子のつむる捲て泣かたり青玩

茨花 雞頭。雁頭。水落。葉
イナナク大花紫あり

馬蘭 葉長サ三尺幅三分花六
瓣淡紫色小あやめ似たり

眉作花 薺△鬼あざこ。花乃
形眉拂ふ似たる故

名づく一説は鬼筋と云り
非 走心も二折入てすの作東起

○つぎみふ薺と薺の三種あり大薺を
鬼筋とみらるる俗に鬼の眉拂ともいふ

又古書に美人艸の事ともいふも如
何と記すは美人艸の事ハ胃ホ貴

海金沙 紫ぼろ。ひまつ。いんげん
もあやめ。大和を三味

纏つるつゝ宿根より生ると
つぐ草より莖甚こつぐ

董 苦野 苦菜 俗小相撲草と
いふ花いふこれいふあり

堀川百首 公實

ひりりいりいりいりいりいりいり
はらばらばらばらばらばらばら

連 つらつらつらつらつらつらつら
非 糸あけぬ娘の旅やすいんげん

甲 々々々々々々々々々々々々々々々々
狂 うめいひりりりりりりりりりり

茶師の倉乃ほすいんげん 赤富

金盞花 長春菊 花金紅色
大サ指頭の如形蓋字被

棋檯花 木李 木梨。花五弁
淡紅色。外國の花欄と列

黄精花 葉竹小似て尖らす花青
白色実の白じて黍粒の区

三月大根 楊花蘆服。春日
葉と食ふ花淡紫

櫻桃 花梅のくく少くして白
葉山く尖り毛あり

梅若葉 新進 秦椒若葉
たる葉 多

菘苴 菘苴何△若荷 在あのとろろ二百三や能

三月菜 春時葉を食入

若菰 菰の葉部 治毒虫刺

胡蔥 非あさつともそらひ

櫻海苔 非花漬の嵐やるる

茶摘 茶を採の時分早き時味全くは遅き神散す

穀雨の前五日を以て上と一後五日を小次再五日又とれみ次く終夜露ふぬまでと上と一

日中にくらげ下とす雨中にくらげ

春雨集 曇るる雨降ぬる小梅は尾山のま乃まんと

能くは月夜とる茶つみか

青茶 昔此製有今無云

手始 茶つみか

綿蒔 八十八夜と五六日見か

八十八夜と過てやうてまを下時とすそれより段々

勝手次第小蒔なり一月も早

までもまうおそうえいこう人

てもそくすくは 白花のか

くろ黄花のかぐろ紅葉綿赤ま

種植 此月種を蒔べきもの

黍 薏苡 烏芋 豇豆 黑豆 豌豆 扁豆 赤小豆 刀豆 胡麻 薑 眉兒豆 黍 石竹 地黄 草

麻子 荆芥 香薷 茜 胡蘆

菊 此月苗を返りよめち 肥つら 移載

仙蓼 芭蕉 秋海棠 芋 大角豆

橘 冬青 木樨 楮 是ら此月う

接木 杠橘 柑柚 香櫞 等清

明の前後小はごては

生類 三月一ヶ月の諸の 生類をあらす

呼子鳥 古今三鳥のいぬ かりとぬくの習の

あれどたが深山と鳴て物さく さい鳥し心得てよむべし古今

の音いなりておぼつらきくまこ 呼とよみふもよみふんるる

夫木 赤人 我せことむしらの山はうとら

君よびくせ衣はあひぬとこ

日 曉呼子鳥 左京大夫

夜とのこは絲きふれをうとを 人もさへぬえのく免のそら

麥鷄 非 岳のぬまれ 引

残る鶴 二月小引さくへる鶴乃 此月もぞ残り居るこ

雲入鳥 鳥沖雲とも云 鳥帰も同ド

事あり鶴雁鴨及びりろ くの鳥の古巢は端と去の

心かり天津雁といへるもより あり雲入鳥の哥連非とら

三月盡古巢へ端る心と結び侍る 津守國基

能名は皆編入たり不三等一音 けりそは旗さひらけり水が晋子

鷓鴣 和朝は渡鳥るり背 小紫赤と交る羽あり

ひの前の白き丸を毛れく
まうた所あり南方の國あり
東南へびて北西へどをさるる
その声やこくくあくゆ人名付
りり寒氣を嫌ふ鳥よて日行
方へくと向ふて霜露を畏
まらぬ朝の日出る内と夕暮
かこへ出る稀きりくぬく

夜分ふと時ハ樹の葉を背上の
覆ふて飛は雀豹が古今注見う
非あやこふは是あてふ落と如白飛

詩 鷓鴣之詞 鄭谷

暖戲烟蕪錦翼奇 鷓鴣小寒
テ暖ナル日野辺ニタハフレ薫ノ品
ウツクシキコト錦ノゴトシト

流應得近山雞 山雞ツクシクシテ山
雞ノスガタニ雨昏青州湖邊過
ニチカシ

ラントスルトキハ青草湖ト云フニツ
ウミノ辺ヲ飛スギテ寒ヲサケルニ

花落黃陵廟裏啼 三月ノ末ニ廟
ノ裏ニテナク

コレ春ノ終ルニシナリ黃陵
ト出スハ春日草ニ對ニスルツ遊子
乍聞征袖湿佳人纒唱翠眉低

鄭谷征役ヲ蒙リテ旅遊ノ身
ナレバ鷓鴣胡啼ヲ聞テ古郷ヲ
思ヒカナシニミナミダ衣ヲウルホセリ

美人ノ哥モ自然ト眉ヲヒソメテ
モノカナシ 相呼相喚湘江曲苦
キテイナリ

竹叢深春日西 湖水ノホトリ竹
ヤブノ内ニテユフ

日ノコロ啼キサケブヲキケ
バイヨクモノカナシキトシ

給 今月食用可シ△給みもつゝ
海辺にて取る事といふとつゝ

魚 今七多二匹のうゝの給瓜
貝あはせとてゆへるりけり西行

非雀いもろぞ素名たけつ其角
狂丹波いっ栗い下る秋にあはせど

侵香浦の春の櫻貝 非山ゆや
くぬぐり淨久

くささる 櫻川魚 櫻魚
貝長吉

櫻川魚 櫻魚

櫻魚

櫻魚

櫻魚

櫻魚

櫻魚

非筑波くまかろ 櫻鯛 櫻鯛

未楊鯛花の名もいやは柳の 鯛

狂一のけ魚の両者む秋のあきど 鯛

柳鮓 形柳葉ふ似たる故名つゝ又 鯛

柳鮓 時の景物と賞美の詞共云 鯛

柳鮓 俗牛の舌 鯛

若鮓 鯛

新六 山川のそとれ本法のうじふ 鯛

能くひひひひひ 鯛

青饅 鯛

上梁 梁の魚と取具へ上り梁の 鯛

必用 此間三月一ヶ月必用 鯛

破 夜九ツ 夜八ツ 夜七ツ

軍 朝六ツ 朝五ツ 昼四ツ

向 酉の方 戌の方 亥の方

於 子の方 丑の方 寅の方

時刻 万事卯の日卯の刻と 鯛

出行作事 鯛

樂事 鯛

天氣 日和を見る小西北の方 鯛

道北の行が故也 鯛

西北の山の根を死ころ時ハ雨 鯛

ふげなる山かひても西北の雲 鯛

蓋屋 菊の實籬のおほいそ
ろり去るべし

辟鼠術 かのへ午
の日鼠の尾を斬て血をとり
屋梁にぬれし永く鼠来らず

妙術 辟井邊百虫法 夜
分雞鳴く時黍と炊

其釜の湯を以て飯を入り
器の置所麩等と井のやぐり

みてあまのく洗へば百虫の類
井の近所あまへ近づくとを

極て驗あり 絶蟻蚰法 螺螄と
取て水小浸し置節心入日其

水と牆壁とをまば長く蚰
蚰とくみ 白髪去術 三月八日

十日十三日此日早朝ふあて
東の方ふひひいて白髪とぬ

くぬし跡より生る髪悉く
黒くさるなり尤若と人乃白

髪をさるこそ
なむかど妙なり

